



気にしてください。おしっこの仕方・・・

こんにちは！浅間山もすっかり雪化粧をすませて、寒～い信州の冬が本番を迎えました。人にとっても動物にとってもこたつが幸せな場所になるこの季節、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。



今回は、冬に気をつけたい病気について紹介します。

さて、寒い季節が近づいてくると、病院でも尿に関する病気が少しずつみられるようになります。そして、こういった病気での来院が増えてくると、私達は「ああ、冬が来たな。」と感ずるくらいです。

冬の泌尿器の病気は、ネコで多くみられます。診察室では、「昨日からおしっこが出ていない。」「何度もトイレに行く。」「おしっこに血が混じっている。」といった声がよく聞かれます。こんな時は、「**尿路閉塞（尿閉）**」や「**膀胱炎**」が疑われ、特に「**尿路閉塞**」は、結石などが尿道に詰まり、尿がたまった膀胱が破裂寸前の風船のような状態になり急性腎不全をおこして、2日で死に至る恐ろしい病気です、すぐに膀胱から尿を出してあげる必要があります。

寒くなるとネコは、温かい場所からなかなか移動しなくなり、飲水量とトイレの回数が減ります。その結果、リンやカルシウムなどのミネラルの血中濃度が上がり、結石ができやすくなり、膀胱炎などの病気が増えてくると考えられています。このようなネコの尿に関する病気は、猫下部尿路疾患（FLUTD）と呼ばれ、冬に多くみられますので、寒くなってきたら尿の色や量、また排尿の様子などをよく観察してください。

→2面へつづく

《お知らせコーナー》

2月の休診日

1, 8, 15, 22, 27

・午後休診日

3, 6, 10, 11, 13, 17, 20, 24

・院長不在日

9, 11, 16, 19 (pmのみ), 20, 23, 28

ホームページ <http://www.sakura-komoro.jp>

携帯でもさくら動物病院のサイトに

アクセスしていただけるようになりました！

メールマガジン月2回配信中！

詳しくはこちら→

大好評いただ
いてます！



さくらスクール

日時：2011年2月27日

1:30～4:00

会場：ベルウィンこもろ

参加には予約が必要となりますので
事前にご連絡下さい。

定員迫るっ！！

0267-26-5600



→ 1面から続く。

さらに詳しくみてみましょう。「尿路閉塞」の発生には性差があり、メスよりもオスでよくみられます。これには尿道の長さや太さが関係しています。オスの尿道はメスに比べ長く、膀胱から尿道口に近づくにつれて細くなっているため、結石や「尿道栓子」とよばれるミネラルや血液などのタンパク質の塊が詰まりやすいのです。また、食べ物も大きく影響していて、結晶の成分となるマグネシウム、リン、アンモニウムなどのミネラル成分の多い食事を続けていると、結石ができるリスクが高まります。

こうしてひとたび尿閉が起こってしまった状態が続くと、貯まった尿で膀胱が膨れ上がり、腎臓にまで影響が及び、急性の腎不全を起こすこともあります。この状態で放置すると確実に死に至ります。

治療は程度に応じて変わってきます。細菌性の膀胱炎を起こしているだけの場合であれば、抗生剤などの服用により落ち着いてくる場合が多いです。一方、尿閉を起こしている場合、尿道閉塞の解除を行い、入院による、膀胱洗浄や輸液、抗生剤の注射などが必要になってきます。どちらにしても、その後の食事管理が大切になってきます。



膀胱にカテーテルを入れる処置

下部尿路疾患は、再発率の高い病気(50~70%)です。一度発症した場合、食事などの条件を改善しない限り、何度でも再発することを覚えておいてください。



顕微鏡で見た尿石



膀胱から取出した結石

新しい仲間が増えました



みなさん、よろしくねっ♪



名前は「まつ・ほっくり」です。

種類：トイ・プードル

誕生日：2010年7月23日

性別：♂

肝臓病で治療中。将来はAAA（訪問活動）で活躍する予定です。

最近「お座り」ができるようになりました！



新しく就任しました！



トータル・マネージャー
小林

この度、動物看護師の
小林さんが『トータル・
マネージャー』、
富田さんが『主任看護師』
に就任しました

今後ともよろしくお願
い致します！



主任看護師
富田



私たちの仕事紹介します・・・第2回

動物看護師的センス？

一つ目は「美的センス」。病院内の汚れに対する敏感さ、好印象を与える身だしなみ、洗濯物の干し方などなど。(面接実習の方のチェックポイントになります)

二つ目は「動物的センス」。動物の気持ちや病気の状態、辛さや痛みなどを観察の中から読み取る力とでもいいでしょうか。動物を『擬人化』しないで考えなければなりません。

三つ目が「飼い主的センス」。動物看護師は飼い主さんと獣医師の橋渡し役です。獣医業にどっぷり浸らず、飼い主さんの立場になって考え、気持ちを理解することが大切です。

そして、何より専門バカにならないで、一般常識を持つことが重要ポイントとなります。

動物看護師が好き！

動物看護師を目指す皆さん。『動物が好き…』だけではなかなか動物看護師にはなれません。動物看護師は、仕事内容は違いますが獣医師と同じ責任の重い仕事です。命を見守る気の抜けない仕事です。辛いことも落ち込むことも多々あります。厳しい仕事ではあります。

でも、元気になった動物を見ると、そして笑顔を取り戻した飼い主さんを見ると、『やりがい』や『充実感』が何十倍も感じられる仕事でもあります。

常に真剣であり情熱を持ち続けることが重要です。

是非、動物看護師という職業を好きになって頑張ってください。

動物看護師 小林

「がん」になった動物たちにしてあげられることは？

先にも述べたように、確かに治るがんも増えてきているのですが、すでに全身に転移しているがんはやはり治りません。したがって治るがんとは、発生してもまだ進行していないがんということになります。つまりどんな悪性のがんでもそれが周囲に広がっておらず、ある一部分にとどまっている場合は、治る可能性は十分にあるのです。がんだからといって諦めるには早すぎます。小さいがんなど恐くありません。



がんを治す最善の方法→それは出来るだけ小さいうちに見つけることです。

どうか、小さいうちにがんを見つけてあげてください。小さければ必ず治ります。それを一番先に見つけられるのは飼主さんあなたです。そして、動物たちをがんから本当に救ってあげられるのは、メスと抗がん剤が使える獣医師ではなくて、飼主さんなのです。動物とスキンシップを十分に取り、よくなでてあげて下さい。そして、気になるしこりがあったら直ぐにかかりつけの獣医さんに伝えてください。また、いつもより元気が無く、食欲が無いときも注意してください。体の中で密かに広がっているがんは動物のちょっとした変化から探るしかないので、明らかに体重が減って元気が無くなってから、検査をしてがんを見つけるのでは遅すぎるのです。がんというものは痛みを伴うものは少なく、知らない間に体の中で大きくなっていくものです。検査によって、知らず知らずのうちに進行しているがんの存在が明らかになることもよくあります。したがって、動物が7歳齡(がん年齢)を超えたら定期的に血液検査・レントゲン検査・超音波検査(エコー)などの健康診断(ドック)を受けることが絶対必要です。

院長

編集後記

いよいよ冬本番です。寒さは身体にきついです、この冬の景色はとても綺麗で感動します。雪景色に青空、雪を被った浅間山など、雪の降らない場所で育ったわたしにとって何もかもが新鮮です。あと、先日雪かきも生まれて初めて体験しました。初めて雪かきした日は、なんだか雪国住人の一員になったようでうれしくて仕方ありませんでしたが2日目からはもう、そんなうれしさは消え去ってしまいました…本当に雪深い場所に住んでいる方は大変だと身をもって感じました。まだまだ、寒い日は続きそうですが皆さんお体に気をつけてくださいね！

動物看護師 岡村